

## I 学校の概要

### 1 地域の概要

扇尾（おうぎお）小学校のある日置市は、鹿児島県の西部、薩摩半島のほぼ中央に位置し、東は県都鹿児島市に、西は日本三大砂丘の一つ、白砂青松の吹上浜と東シナ海に面している。本市の人口は、約5万2千人で、2005年5月に、近隣の4町が合併して新しく誕生した。妙円寺詣りや流鏑馬、せつぺとべ等に代表される歴史的な伝統行事が数多く受け継がれると共に、薩摩焼の里としても広く知られている。

本校区は、市役所より南側7kmの山間部に位置するが、鹿児島市中心部からも約20kmと、へき地としては比較的利便がよい場所にある。また、NHK大河ドラマ「篤姫」で登場した「小松帯刀」が治めた領地の中にある。典型的な山村型農村地帯であり、平均気温は、年間を通じて平坦地より3℃ほど低い。

校区は、五つの集落からなり、戸数約100戸、人口260名余である。校区民は、PTAと一体となり、公民館を中心にして農村活性化運動をはじめ、田植え踊りの一つである虚無僧踊り等の郷土芸能の保存や子ども会活動の育成など、教育・文化の向上にも組織的且つ熱心に取り組んでいる。その取組は、広く認められ、平成20年度には、優良PTA文部科学大臣賞を受賞した。また、校区には、歴史的な史実や数々の伝説も残されているが、中でも約700年前、高僧石屋和尚によって開山された深固院が有名である。「くしだんご」を鹿児島では特に「しんこだんご」というが、ここ扇尾が発祥の地である。

### 2 本校の概要

明治5年、学制頒布と共に時の戸長が民家を借りて、児童60名で教育を行ったのが始まりであり、本年度創立134周年を迎えた。本年度の児童数は、13名の極小規模校であり、昨年度より、学校創立以来初めてとなる在籍のない学年が存在し、6年生は、児童数5名の単式学級となっている。

本校は、数年来、「小さな学校の大きな教育～清新澁刺・自信と誇り～」をキャッチフレーズに、様々な教育活動を展開してきた。まず、平成19・20・21年度と、日置地区・日置市の研究指定を受け、国語科の研究・実践に力を注ぎ、学力の向上を図ってきた。また、「オペレッタ」「子ども俳句」「一輪車サーカス」に積極的に取り組み、子どもたちに豊かな表現力や感性を育ててきた。これら特色ある教育活動の計画的・累積的实践が、大きな実を結び、平成19年度以降「かわなべ青の俳句大会」での最高賞・学校賞をはじめ、「県福祉作文コンクール」最優秀賞や「南九州美術展絵画」県知事賞等、県レベルでの大賞の受賞が相次いだ。そして、子どもたちには、自信と誇りが芽生え、学校は日本一の複式校を目指し、活気に満ちあふれている。

## II 研究の概要

### 1 研究主題

**一人一人に確かな読む力を身に付けさせる国語科学習指導の在り方  
～「説明的な文章」の指導を通して～**

### 2 研究主題設定の理由

#### (1) 本校の教育目標から

本校では「自分のよさを伸ばし、かしこく・やさしく・たくましい扇尾の子どもの育成」を教育目標に掲げ、めざす子ども像として「目標を持ち、意欲を持続し、自ら学び、深く考える子ども」「自分の思いや考えを豊かに表現できる子ども」「確かな学力を身に付けた子ども」を設定している。これらは、本校の努力事項である「実態の的確な把握」や「学習指導法の改善」「表現力の育成」により、基礎・基本の定着と内発的・主体的な学習意欲の醸成がなされたときに具現化されるものと考えている。つまり、両者をスパイラルに絡み合わせると共に、少人数の特性を生かし、個に応じた指導を行うことで、どの子どもたちも高めていくようにしたいのである。

特に、国語科はすべての学習を支える教科であり、全国的にも母語教育の重要性が指摘される場所である。中でも、「確かな読む力」を身に付けさせることが、他教科を含めたところの学力向上につながるものと考えた。

そこで、国語科の「読むこと」の「説明的な文章」における「基礎・基本」と「学び方」の定着を目指した指導の工夫を通して、めざす子どもの具現化を図りたいと考えた。

## (2) 社会の要請から

「生きる力」の育成を目指し、様々な取り組みがなされてきているが、PISA調査の結果から学力低下問題はさらにクローズアップされ、社会からの学力向上への要請はますます加速している。国語科においても例外ではなく、読解力の大幅な低下が指摘されている。これらの状況を踏まえ、時期は前後するが、2004年2月の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力」では、国語教育の重要性を説き、特に、小学校段階における指導の重点を、「読む・書く」ことにあるとしている。本文を一部抜粋すると、「いわゆる『読み・書き』の徹底を図ることが重要であること、情緒力を身に付けるには『読む』ことが基本になること、論理的思考力の育成は『書く』ことが中心になると考えられることによる。つまり、今まで以上に、「読む・書く」の定着を図ることが重要である。」となっている。発達段階に応じた国語力を育成することは、子ども一人一人の様々な能力を構成するための基盤となる。子どもたちがこれから生きていく社会の中で、適切に対応し、よりよく生きる力を身に付けさせるために、国語教育を一層充実させていくことが急務であると考えた。

## (3) 子どもの実態から

子どもたちは、明るく素直で、何事にも精一杯取り組み、学習に対しても一生懸命取り組んでいる。しかし、学力・意欲共に個人差が大きく、一人一人の子どもに確かな学力を身に付けているとは言い難い。これまで、国語科に限らず、社会科や算数科、理科等の他の教科においても文章を読むこと自体に滞り、学習が遅れるという実態が見られ、「読み」の力が十分に身に付いていないという現状が指摘されていた。

また、標準学力検査(NRT)の結果からも、全学年で「読むこと」の通過率が低く、「読み」の力が十分身に付いていないことが分かった。

以上のことから、国語科における「読むこと」の領域、特に、一定の方法を用いながら、情報を理解するという、身に付けた「読み」の力が、他の教科の「読み」への応用が行いやすい説明的文章にしばった研究を進めることで、子ども一人一人に「確かな読む力」を身に付けさせ、国語を正確に理解することができる子どもを育成したいと考え、標記のような研究主題を設定した。

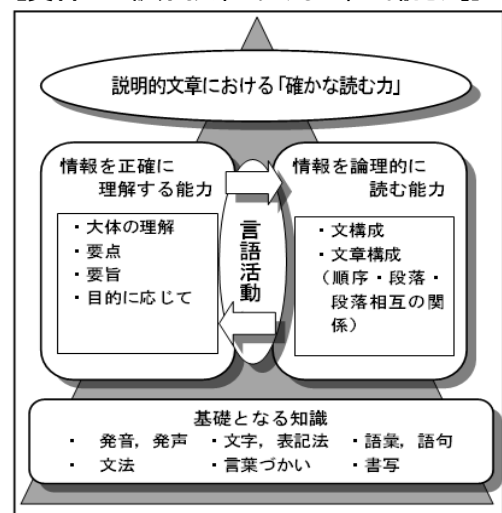
## 3 研究主題についての基本的な考え方

### (1) 「確かな読む力」とは

「読むこと」の各学年の内容を確実に身に付け、日常生活でも生きてはたらく力を、「確かな読む力」ととらえる。その「確かな読み」を支える能力として、主に2つの能力が必要であると考えている。1つめは、文章に書かれた内容や事柄、つまり情報を正確に理解する能力である。2つめは、情報を論理的に読む能力である。言語は、一定の形式をもち、その形式を理解することなしに、文章の理解は不可能である。これら2つの能力を切り離すことなく、どちらに偏ることもなく、「聞くこと」「話すこと」、「書くこと」等の様々な言語活動を通して相互に関連させながら育てることが、「確かな読む力」の育成につながっていくものと考えられる。さらに、子ども一人一人が言葉の主体的な使い手として「確かな読む力」を発揮できるようにするためには、子ども一人一人がより主体的にかかわることができる「読み」の力を育成することが重要である。それは、自らの目的に応じた「読み」の力であり、自らの考えを広げ、深め、再構築するための「読み」の力である。

それぞれの能力の下位能力も含め、構造化すると上記の【資料1】のようになる。

【資料1：説明的文章における「確かな読む力」】



## (2) 研究の仮説

以上を踏まえ、確かな読む力を身に付けさせるために、次のような3つの仮説を設定し、研究を進めることにした。

仮説1

国語の学習で個に応じた**段階的な「読み」の指導**を繰り返せば、子ども一人一人に「確かな読み」の力が身に付くのではないだろうか。

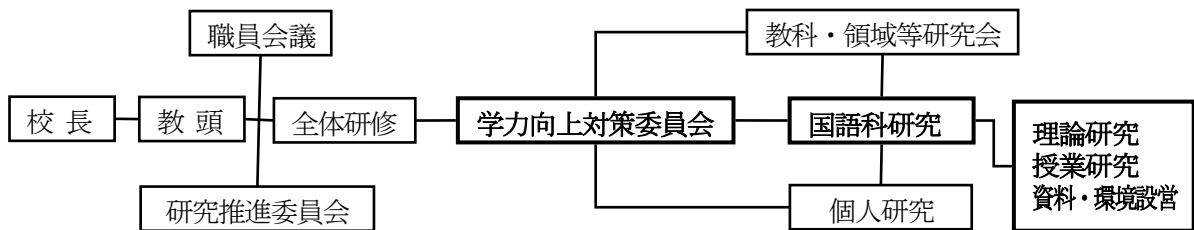
仮説2

複式国語科学習において、**ガイド学習を中心にした学習指導方法の改善**を図れば、子ども一人一人に「確かな読み」の力が身に付くのではないだろうか。

仮説3

保護者との連携を図り、**国語科における家庭学習の仕方**を身に付けさせれば、子ども一人一人に「確かな読み」の力が身に付き、国語に関する関心が高まるのではないだろうか。

## 4 研究組織



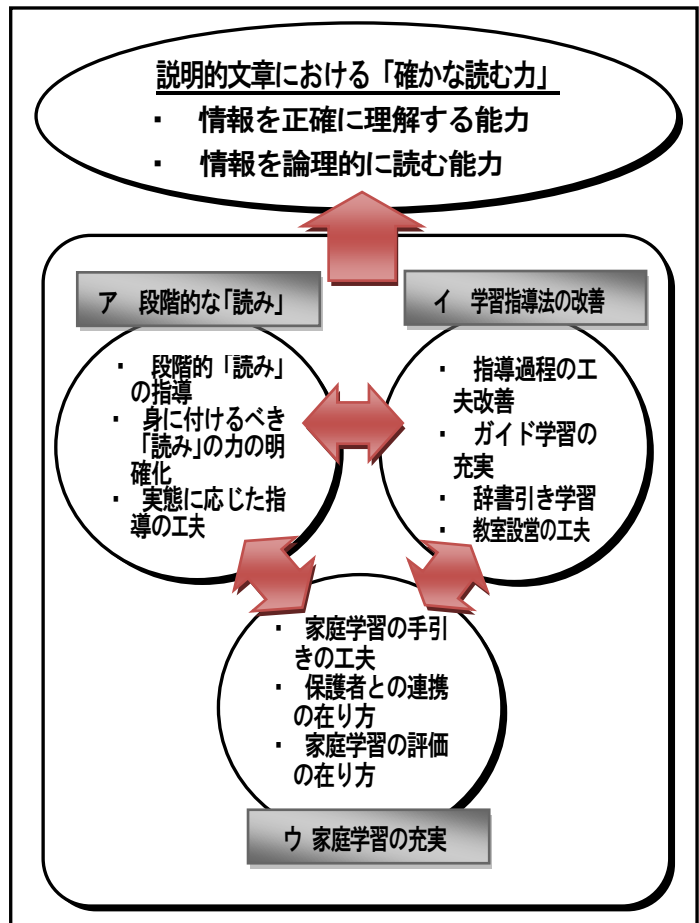
## 5 全体構想図

本校では、確かな読む力を身に付けさせるために、これまでの研究の結果もふまえ、次のような3つの側面から課題解決へのアプローチが必要であると考えた。

- ア 個に応じた段階的な「読み」の指導
  - ・ 段階的「読み」の指導の調査・研究
  - ・ 各学年での身に付けるべき「読み」の力の明確化
  - ・ 学級及び個の実態に応じた指導の工夫
- イ 学習指導法の改善
  - ・ 指導過程の工夫・改善
  - ・ ガイド学習の充実（複式の視点）
  - ・ 辞書引き学習法の導入
  - ・ 意欲を喚起する教室設営の工夫
- ウ 家庭学習の充実
  - ・ 家庭学習の手引きの工夫
  - ・ 保護者との連携の在り方
  - ・ 家庭学習の評価の在り方

右の【資料2】は、研究における全体構想図である。

【資料2：「確かな読む力」研究の全体構想図】



### Ⅲ 研究の実践

#### 1 仮説1の検証 個に応じた段階的な「読み」の指導

##### (1) 子ども一人一人の実態把握と個人ケアカルテ

子どもの実態を把握しておくことは、授業を進めていく上で欠かすことのできない最も基本的なことである。特に、計画通りに「わたり」を行う必要のある複式学級の指導において、実態の把握と分析、レディネスの引き上げは、授業の生命線とも言える。

そこで、全ての子どもレディネスを「おおむね満足できる」段階まで引き上げることで、学級内の個人差を縮小し学習をスムーズに進められるようになることを目指し、本校独自の個人ケアカルテ【資料3】を作成し、活用を図った。

##### (2) 段階的な「読み」の研究

本校においては、「段階的な読みの指導」を、段階に応じて何を指導するのかという「段階的指導内容」と、各学年段階、学級、個の実態に応じてどのような手立てを講じながら指導を行うかという「段階的指導方法」の二つに分類した。

##### ア 段階的指導内容

まず、「段階的指導内容」については、各学年段階で身に付けるべき読みの技能を明らかにし、全教師による系統的な指導を可能にしたのが【資料4】である。この表は、学習指導要領や教科書教材文等の内容を踏まえ、確かな読む力を支える読みの技能を、音読・文構成・文章構成・接続語・指示語・内容把握・意見や感想の7つの要素で分類し、学年ごとに整理してある。これらは、学年段階の重点指導内容であると同時に、個の段階に合わせてフィードバックする時の重点指導内容ともなる。ただし、説明的文章である以上、ほとんどの要素が、1年生段階の文章から含まれている。よって、各学年に示されている内容については、一つまたは二つ下の学年の指導段階で意識されておくべきものでもある。また、支える技能は多岐にわたり、相互に作用し合っているが、系統的に概観できるようにするために、このような整理の仕方を行った。

##### ●具体的実践例● 段階的指導内容に基づく授業実践

授業を構成するに当たっては、段階的指導内容に基づき、1時間の授業でおさえるべき具体的指導内容を明確にした。関連する学習を、どの学年で初めて行ったのかを把握した上で、実態と照らし合わせながら、既習の教材文や文章構成図を提示したり、考えさせたりすることによって、理解のための手助けとした。【資料5】は、光村図書5年「サクラソウとトラマルハナバチ」（5/8、ねらい：トラマルハナバチが消えた理由をとらえる。）における具体的指導内容である。

〔国語科〕個人ケアカルテ		平成 年度入学 名前				
		学 力 の 推 移				
1	N R T 学力偏差値及び領域正答率	2年	3年	4年	5年	6年
学年	偏差値	47	36	30	50	
	話す聞く	62	73	27	76	
	書く	38	14	47	69	
	読む	69	29	29	38	
	言語事項	71	50	29	63	
2	基礎・基本定着度調査（5年時）	結果	県平均	差		
得点						
傾向と対策						
年	傾向（話・聞・書・読・言）	対策				
4年	・ 伝えたいことを選んで話すことができない。（話・聞） ・ 目的や順序を意識して書くことができない。（書） ・ 初めが得意。場面を想像したり中心をおさえて読んだりすることが苦手である。（読） ・ 既習の漢字の読み・書きの達成率が非常に低い。（書）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語全単元に苦手意識を持っているため、達成感をあじわわせる等の工夫を行う。</li> <li>・ 学習教材の確かなスラスラ読みができるようにする。</li> <li>・ 教材等の視写に取り組み、ノート・日記指導を充実する。</li> <li>・ 漢字の家庭学習の提出を確実にさせるようにする。</li> </ul>				
5年	・ 自分の考えを伝えることが苦手であり、質問への答えも黙ってしまいがちである。（話・聞） ・ 文のつながりを考えながら、自力で作文を書くことが難しい。（書） ・ 初めて出会う文章の理解は、ほとんどできていない。（読） ・ 修飾・被修飾の理解や漢字の書き取りの達成率が低い。（書）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全校育活動を通して、一つでも自分の感想や考えを書く機会を多く確保し、自信を持って読めるようにする。</li> <li>・ 日記指導や作文指導を通して、基礎的な作文の書き方をおさえる。また、短作文の学習をさらに取り入れていきたい。</li> <li>・ 初級スラスラ読みができるよう音読・視写に力を入れる。毎日の漢字テストを徹底する。</li> </ul>				

【資料3：本校独自の個人ケアカルテ】

学年	重点指導内容 (身に付けさせたい読み技能)	段階的指導内容
1	音読	1 既習の平仮名、カタカナ、漢字を正しく読むことができる。 2 一音一音、一文一文をはっきりとした発音で読むことができる。 3 ひとまとまりの語句や文として読むことができる。
	文構成	1 どこからどこまでか、一つの文かが分かる。 2 文の構成（「だれが、どうする。」「なにが、どんなだ。」）が分かる。 3 主述の関係を整えることができる。
	構文成章	1 文章は、いくつかの文でできていることが分かる。 2 文末表現から「問いかけ」の文が分かる。 3 「問いかけ」に対する「答え」の文を見つめることができる。
	把内握容	1 「～です。」「～ません。」の文末に気をつけて読むことができる。 2 どの文がどの挿絵や写真の説明になっているかが分かる。 3 挿絵や写真を見て、簡単な文を作ったり、語をしたりすることができる。
	感想見	1 文章を読んで、知っていたことや経験したことを、初めて知ったことを発表できる。 2 文章を読んで、おもしろいと思ったことや不思議に思ったことを発表できる。
2	音読	1 既習の平仮名、カタカナ、漢字を正しく読むことができる。 2 ひとまとまりの語や文として読むことができる。 3 まとまりや内容、言葉の響きなどについて考えながら読むことができる。
	構文	1 省略された主語を補うことができる。 2 やや複雑な文型の主語、述語を見つめることができる。 3 やや複雑な文型の主述の関係を整えることができる。
	構文成章	1 「はじめに」「つぎに」「おわりに」等、時間の順序や事柄の順序を表す言葉が分かる。 2 不規則にならべた文章を、正しく並べ替えることができる。 3 順序を表す言葉を使って、短い文章を書くことができる。
	把内握容	1 「～です。」「～ません。」の文末に気をつけて読むことができる。 2 事柄の移り変わりや変化が分かる。 3 時間的な順序や様子の移り変わりを読み取ることができる。

【資料4：各学年段階における段階的指導内容】